

ケルト民族と日本民族との類同性に関する一考察
イキニエをめぐる予察

高 重 進

**The cultural similarity between Celtic and Japanese peoples
with regard to ancient sacrifices**
Susumu Takashige

Abstract

In "The Conquest of Gaul" (commentarii de bell Gallico), Cassar Garius Iulius, B.C.100 ~ B.C.44, called the Celts barbarians, whereby have had their belief and rites of human sacrifice offering to the Gods. These belief and rites have often been provoked of the contradictory reaction from Western peoples, especially among the pious Christians until now.

On the global point of view, sacrifices especially in the case of human being are distinguished by their practices into two types; by burning, holocaust, and by burials. Celts belong to holocaust, so-called bloodless human sacrifices, as seen in "The Conquest of Gaul", and the Hindu as well.

On the contrary, Japanese and Chinese belong to the latter; burials; Hitogaki in Japan and Heibayo in China, as seen substituted for the sacrifices of the living being.

In these countries, human sacrifices had been offered as the sacrificial gift, but the practices were often put under the ban; Rome in B.C.97; China in A.D.502 ~ 19; Japan in A.D.646. Recently they were replaced by any living being as bloodless offerings as foods and drinks. These shift may also be due to the suppressions of an newer religions, especially Christianity and Buddhism. In their each worlds their cultural structures may be consisted of stratified, covert and overt.

はじめに

"The Celtic world" 『図説 ケルト文化誌』の中でバリー・カンリフは「ギリシア人にとって、「蛮人」とはギリシア語を話さない者ではなく、理解不能な音を立てる者のことだった」とし、「アイルランドの伝承文学を読んだりした者なら、彼らケルト人を蛮人とそしったりしない。⁽¹⁾」と述べている。アイルランドをみる場合に、その祖先であり、ケルト民族の源流である、現在のオーストリアの地、ハルスタット湖畔で1846年に鉱山検査官ヨハン・ゲオルク・ラムスアウアーの発見が端緒となって発掘され明らかになったハル

statt文化（B.C.800～B.C.450年）及びその継承発展したものである現在のスイスのノイエンプルク湖畔において1858年アマチュア考古学者のシュヴァープ大佐の発見が端緒となったラ・テーヌ文化（B.C.450～紀元頃）は余りにも有名であるので言うをまたないであろう。それにもかかわらず、一方ではカエサル（俗名シーザー）の『ガリア戦記』⁽²⁾の記述にみられるローマ軍のガリア遠征の報告書にはガリアのケルト人は「野蛮」であるという記述がいくつも見出されるのに疑問を持たずにいることが第1点である。第2に指摘しておきたいことは、そのケルト民族の特性として靈魂不滅があげられていることは周知のことである。それをどう理解するかということである。

そのことに特に関心を持つに至ったのは、かつてアイルランド研究をテーマとして文部省の在外研究員として北アイルランドの Queen's University of Belfast に滞在していた時に、⁽³⁾同大学の院生から日本からの映画が上映されるので見に行かないかとさそわれた時、どこに興味があるのかとたずねたところ、日本は靈魂不滅の民族の特性をもっている点にあるということであった。映画はラフカディオ・ハーンの「怪談」であった。ゲルマン系のヨーロッパ人がもっているケルト民族観が日本民族に対してもっているものと同じであることであった。本稿はこのような動機からケルト民族と日本民族の特性には類同性があるのではないかと考え、生贄を中心に置いて考察を行ったものである。

1. カエサル『ガリア戦記』の『野蛮人』

カエサルは自らひきいたローマ軍のガリアの地への遠征の状況について西暦紀元前58年～51年までの8年間の中、カエサルの死後ヒルティウスが書いた最後の第8巻を除いて毎年1巻ずつローマに書送ったものをもとにまとめたのがこの書である。宛先はローマの元老院である。文章そのものは、毎年の現地報告書をもとに紀元前52年から51年の間にまとめ直したものであろうということ、訳者近山金次氏が冒頭の解説で、文脈の見事な統一性と、つけ加えられた第8巻のヒルティウスの言葉によってその妥当性が指摘されている。

最初に、問題として指摘したローマ人側のカエサルがガリアの地及びガリア人を、野蛮・野蛮人という言葉はどこでどう使用しているかを見ていきたい。使用ヶ所を順次一覧表にすれば次のようである。

部族との見聞・経験は目的が遠征であった関係でまず戦いであった。ガリアの地で戦ったローマ軍を率いたカエサルにとって目につくのは戦いのやり方であることは当然のことである。その具体的な戦い様の前に戦いのやり方を紹介しておく必要がある。その目的は

人質・武器逃亡奴隷を求め戦うことである。それ故、戦いには降服の使節が当事者相互間にかわされる。戦いには騎馬によるものと徒歩によるものがあり、相手の部族によっても異っていた。

戦い方は何よりもここで取上げる野蛮なということと直接的に関連することは「武勇」である。それが部族によって異り、戦いの目的・方法によっても異ったが、その1例として取上げてみよう。ベルガエ人の1つのグループであるペロウァキー族について次のように述べられている。

「商人も葡萄酒その他のぜいたくになるものの持込みを許されない。その理由は武勇をゆるめると思っている。凶暴な武勇のある人々で、他のベルガエ人がローマに降服し祖先の武勇を棄てたと嘆き悲しんでいる。絶対に使節も送らず、どんな媾和条件もとらあわない。⁽⁴⁾」とのべている。これは彼等の部族対部族の戦いの場合であるが、カエサルのガリアの地方の部族との戦いは、カエサルの巧妙な戦略を行使したところもあったと考えられるが、部族間にあってはそれまでの歴史的関係を聞出して誘導し、戦いを交えずして降服させた場合も多い。先述したブローウァキー族の場合においてもカエサルの将ディウイキアクスはベルガエ人の中で誇高き部族で、人口も多く優勢な部族であったが、それを降服に導くために、ペロウァキー族が戦争が起ればいつも資力と援助を求めお世話になっているハエドゥイー族を使って、一時はカエサルに隷属して屈辱と侮蔑をうけることを嫌ってローマに挑戦する一幕もあったが、その謀反人が考えを改めてブリタニアに逃走するとハエドゥイー族はカエサルのもとへ帰り、「どうか慈悲と親切を示してほしい、ペロウァキー族だけではなくハエドゥイー族もペロウァキー族のためにお願ひする。カエサルがそうしてくれればベルガエ人全部の中でハエドゥイー族の権威は一層高まる」⁽⁵⁾と懇願させて征服させるというようにもっていき、戦わずして勝利を手にするという手法を用いている。ハエドゥイー族の名誉のためにペロウァキー族の降服を認め、人口も多かったこともあり600人の人質を取り、武器もすべて町から集められたのである。こうした場合、人質には有力者の子供も含まれた。⁽⁶⁾ヘルウェティー族の陣地からギリシア字で書かれた表が見つかりカエサルに渡されたが、その表には細かく、武装して本国を出たものの数、それに子供・老人・女が別々に数えられていた。⁽⁷⁾」として注として galli は文字をもたず、ただ Druid 僧侶がギリシア文字を借用したもので、一般の人々はこれを知らなかったものらしい。⁽⁸⁾戦いはかくして一区切りつき、次の攻撃目標のアンピアーニー族の地に向うのである。この部族はネルウィー族と境を接した地域に蟠居した部族である。

『ガリア戦記』にみえる野蛮人

巻 - 節	野蛮人の記事	対 象
- 31	凶暴野蛮な人々がガリアの土地を愛するようになってから、	ゲルマーニー人
- 33	凶暴野蛮な人々が全ガリアを占領した場合、	ゲルマーニー人
- 40	こんな計略は野蛮な人々には役に立とうが、	ガリー人
- 35	全ガリアが平定し、戦争の評判が蛮族の間に行き互ると、	全ガリア
- 6	陣地へ押しよせた野蛮人の数は3万余、	ガリー人
- 14	野蛮人の船の船尾は、	ガリー人（ガリア船）
- 15	野蛮人はことの成り行きを見、逃げた。	ガリー人、ウェネティー族
- 16	使節の権利が野蛮人によって守られた。	ウェネティー族
- 23	野蛮人は地形と人工で固めた町が、数日でおとされた。	ウォーカーテース族・タルサーテース族
- 10	島には凶暴野蛮な部族が住み、	不明
- 21	船を下りてまで野蛮人の中に立入らなかった。	ブリタンニー人
- 22	自分らは野蛮人でローマの風習になれないので、	モリニー族の自称
- 24	野蛮人はローマの計画を知って騎兵と戦車を使って、	ブリタンニー人
- 25	野蛮人に目新しい軍艦を、	ブリタニアのガリア人
"	見なれない廻転機にひるんで野蛮人は後に退いた。	"
- 32	野蛮人が新しい策略をはじめた。	ブリタンニー人
- 34	野蛮人はローマ軍の兵士の少数なことを告げ、	ブリタンニー人
- 34	野蛮人は大いに策略をつかった。	ガリー人（カルヌーテース族エプロネース族など）とゲルマーニー人
- 10	野蛮で無智な人々は食糧が欠乏すれば不利な条件でも戦争する。	スエービー族
- 29	カエサルがまた来るかも知れないという恐れを野蛮人からとってしまわないよう、	ウビー族
- 34	野蛮人は地形そのものに護られることになる。	メナビー族、アトゥアートウキー族
"	野蛮人も待ち伏せて味方を取り囲む。	" , "
- 35	野蛮人の欲がる家畜を数多く獲得した。	エプロネース族
- 37	野蛮人がローマ軍と指揮官を破り、	ゲルマーニー人
"	みんながおじけづき、野蛮人は捕虜から聞いた通り守備隊がないことを確認。	ゲルマーニー人
- 40	野蛮人に包囲されて死んだ。	ゲルマーニー人
- 42	野蛮人を陣地の堡壘と門で押し返した。	ゲルマーニー人

戦った兵には騎兵と歩兵の別があったが、両方共にテラ（tela）を用いた。テラとは少し隔ててする戦争に使われる武器で、槍・矢・剣などを言う言葉で槍の穂先は鉄でできておったが、これらの武器は戦う場合と共に服従のしるしにも用いられた。敗者は二本の槍を立て、もう一本の槍をその上に渡し、その下を取れた者は武器を棄てて服従のしるしとしてくぐらなければならなかった。⁽⁹⁾ 武器はローマ人のものもギリシア人のものに比して貧弱で凡そその模倣物であると言われている。大きな飛び道具には迴転機（tormenta）には大弓機（catapultae）・投物機（ballistae）・小弓機（scorpiones）の3種類があったが、それを使用した投石隊（バレーアレース人の）・弓兵（クレータエ人の）があったが、ローマ人の戦士の専用であるとは記されていないので、そう彼我の差があったとは思われない。

訳者金山近次氏が述べているように、「文脈には見事な統一がある」とあり、「単に1つの報告書でありながら、期待されて世に出ると、敵からも味方からも賞讃と尊敬をちか得た⁽¹⁰⁾」ものであるにもかかわらず、最初からガリアの土地の人々を野蛮人とは言っていないことはまず注目しておきたい。ハエドゥイー族の一人ディウィキアクスが人々の代表としてカエサルと公式会議とは別に密かに隠れて会った時にそれまでの歴史の経緯をカエサルに言った中に出てくる次の言葉である。このガリアの地域には2つの党派があり、一方は優勢なハエドゥイー族と、もう1つはアルウェルニー族である。この2つの部族はライバルとして覇を争ってきたが、途中でゲルマーニー族がアルウェルニー族やセクァニー族に傭われることになり、最初、ゲルマーニー人約1万5,000人がアルウニー人やセクァニー族に傭われてレーヌス河を渡って迎えられることになった。凶悪野蛮な人々がガリアの土地と文化と資源を愛するようになってから更に多くのゲルマーニー人が渡って来て現在ではガリアの地にいるものが12万の数に上るようになった。ハエドゥイー族とその被護民は再びこれらの人々と戦ったが敗北し貴族・元老・騎兵もみんな失ってしまい、ローマの好意・友情を得ていたものが戦いに敗けてセクァニー族に人質にとられたのでローマ人にこの人質の返還のために助けを求めたいこと、ゲルマーニー人の命令にも従うことを誓約しないのはこの私だけであるといわば泣きごとを言った中で、ゲルマーニー人のことを凶暴野蛮な人といったもので、最初に出てくるのはガリアの地に移り住んだゲルマーニー人をガリー人が言った言葉としてカエサルが述べた言葉である。

次にみられる例は、ガリアの地が平定され、「この戦争の評判が蛮族の中にも行き互ると⁽¹¹⁾」と蛮族という言葉でガリアの土地の人々を指して述べていることである。

第3の例はカエサルが冬を迎えたので冬営の軍をセルウィウス・ガルバに託してイタリアに帰るに当たり、ナントゥアーテス族、ウエラグリー族、セドゥーニー族など戦って征服したアプロゲース族の周辺とレマンヌス湖とロダヌス河からアルペスの峰々にかけて広がる人々の許へ派遣して常日頃ガリアの地からローマへのアルペス越えの商人が通う道を、危険もなく莫大な関税を彼等に支払わなくてもすむように、この地で戦勝歴もあり、使節が来たこともあり、知名度の高かったこともあって交渉に行かせ講和が成立したので、オクトドゥールスというウエラグリー族の村の側に引つれているガリー人を、これと河の対岸側にガルバとローマ軍を分けて冬営させたところ、ガリー人にあてた場所から冬営のガリー人と村の人たちが夜中に立去って四周の山々にセドゥーニー族やウエラグリー族の大群が集っており、ガリー人が企んでいることがわかり、戦争が開かれた時の記事である。ローマ軍はローマ軍の陣地を取りに来た敵を到る所で取囲んで殺し、陣地に押し寄せた野蛮人の数3万余の中3分の1以上を殺したとのべた部分である。⁽¹²⁾ここではじめて野蛮人という言葉が用いられ、以降ガリア人の代名詞として野蛮人という言葉が用いられるようになる。カエサルが通常戦いの記事の中で用いている敵という言葉ではなく、また何人とか部族名でもなく野蛮人とはじめて呼んだことにはそれなりの理由とそれまでに至った情報があったのであったろう。その中には戦いに終止符を打ち、人質を出させてガリー人は別の所へ冬営させたことをいいことにして裏切りと不意打ちに出たことがあったと推測される。以降の例はいづれもカエサルが戦った敵とかガリアの土地の人々と言う代りの言葉として使用されていることは表からみても明らかであろう。

それではカエサルは6巻に至ってはじめてそれまでの見聞をガリアの地の風習としてまとめているので検討を加えることにする。

以下多少煩雑ではあるが関係の記述部分を取り出してみることにする。カエサルはゲルマーニーとの対比でのべるとことわっているようにゲルマン民族の場合を見落したのではなく、ケルト民族における特徴を明確にすることを目的としていることは最初に指摘しておく必要がある。

(1)ガリアで最も尊敬される人間は僧侶(ドルイド)と騎士である。「僧侶は神聖な仕事をして公私の犠牲を行い、宗教を説明する。教育をうけようと多数の青年が集ってきて尊敬されている。公私のあらゆる論争を裁決し、犯罪があつたり、殺人が行われたり、相続や国境についての争いが起きたりすると、同様に裁決して賠償や罰金を決める。個人で

も部族でもその裁決に従わないと犠牲にあずからせない。この罰は最も重い。犠牲にあずかれないものは不敬の汚れたものと見做され、皆がこれから遠ざかり、これに触れて汚れないために近づいたり、話したりしなくなり、たとえ求めても裁判はうけられず、公職につくこともできない。」(2)「一年間の或る時期にガリアの中心の地とされているカルヌーテース族の領地の神聖な場所に会合する。争いのあるものは凡て各地からここに集って僧侶の裁判を待つ。」(3)「僧侶はその教えを文字に書くことはよくないと考えているが、他の事柄は公私の記録でギリシア字を使っている。⁽¹³⁾」(4)「僧侶はまず靈魂が不滅で、死後はこれからあれへと移ることを教えようとする。こうして死の恐怖は無視され、勇気が大いに鼓舞されると思っている。」(5)「ガリアの部族はみな宗教に深くうち込んでいて、そのために、重病人とか戦争や危険に身をさらすものは生贄として人間を犠牲にするか、犠牲にすることを誓い、その犠牲をとり行うものとして僧侶を使う。人の生命には人の生命をささげなければ不滅の神々はなだめられないと考えているから、同じ犠牲を公けにもきめている。或いは大きな像を作って、その細枝を編んだ四肢に生きた人間をつめ、火をつけて焔でまいて人を殺す。」(6)「盗みや強奪やその他の罪でつかまったものの刑罰は不滅の神々にとりわけ喜ばれると思っている。しかし、そんな人間がない場合には罪のないものまで犠牲にする。」⁽¹⁴⁾(7)夫は子供にも妻にも生死の権をもつ。高貴な家族の父が死ぬと親戚が集り、死の事情が疑わしければ、奴隷に対するような方法で、妻を訊問する。もし罪が認められれば火と苦しみを加え殺す。(8)ガリー人の文化に比して葬儀は派手で業々しい。「生前に愛していたと思われるものを動物に至るまで火に入れる。今から少し遡れば、はっきり愛されていた奴隷や被護民も葬儀がすむと一緒に焼かれた。」⁽¹⁵⁾とのべられている。

以上使用例の3例と第6巻のガリア人の特徴についての引用の部分を経括すると次のことが指摘できるであろう。

第1は使用例の第2に挙げた「蛮族の間に行き互ると」と述べたところである。この場合は蛮族とはローマ人以外のガリアの地に居住する全ガリア人を指していることがわかる。この使用法はあたかも中国史における夷狄の使い方、即ち、漢族を中心に、夷は東方の、狄は北方の、未開の民を称したと同様に、「すべての道はローマに通ず」と言う考え方と同様の、一種のローマを中心とした中華思想の表われとして野蛮人が使われているということである。具体的行動が好戦的であること、凶暴性があることにあるとするが、ローマ軍も相当な残虐なこともやっていることは先にあげた第3巻の紀元前57～56年のガリバが

襲われた戦争で野蛮人3万余の中3分の1以上を殺したことでも示されている。⁽¹⁶⁾

次に挙げたガリア人の特色では(1)の公私の犠牲の定め、(5)の危機のせまった場合の生贄とその方法、特に人の形を細枝で編んで生きた人を入れ火をつけて犠牲とすること。(6)の刑罰に人の犠牲にすることが神に喜ばれること、(8)の奴隷及び動物の犠牲と重要な項目はいづれも犠牲が特記され、それが「ゲルマーニー人はこの風習とまるで違う。神聖な仕事をする僧侶もなく、犠牲にも関心がない。見てはっきりとその力に助けられているもの、太陽や火や月だけを神々としている。」と述べていることである。⁽¹⁷⁾

ここで明らかなことは、カエサルはガリアの地に居住する人々を見分ける判断の基準としてガリー人、つまりケルト民族の人々と、ゲルマーニー人、つまりゲルマン民族の人々とは生贄(犠牲)を行うか行わないかであると理解していたことが『ガリア戦記』の記述においても全体の内容の流れからもわかることである。

カエサルがこう書いたのは紀元前53年冬の終わらない時期でブリタニアより帰ってみると副将は戦いで失い、それをよいことにしてガリアの地では険悪な空気がただよい、ガリアの大動乱が予想された時のことでもあった。ケルトとゲルマン民族との分析の記事の直前にカエサルは次のように記している。

「野蛮で無知な人々は食糧が欠乏すれば不利な条件でも戦争をするようになることを予期してウビー族に家畜と財産を土地から町の中に持ち込ませ、多くの偵察兵をスエービー族に入れて何が行われているかを確認させた。⁽¹⁸⁾」とある。つまり、カエサルはガリア人をガリアの地に入って遠征することを決めた紀元前58年以來6年間の情報蒐集と遠征の経験とから野蛮で無知な人々と評価していたわけである。戦いにおける殺戮のし方のみを意味しないことは、ガリア人の行為とカエサル自身が行った戦いの記述を見れば明らかである。つまり、カエサルが注目したことは彼我の戦いに於て殺すことにはではなく、他の理由、特に神に捧げる、神を宥めるために捧げるための殺人を問題としたわけである。

2. プリニウスの『博物誌』

『ガリア戦記』はカエサルがガリアの地に遠征將軍または支配者としてのぞんだ際の記録である。そのために被征服者・被支配地の観察には鋭いものがあったが、カエサル自身の国との比較はほとんどなされなかったことである。従って、カエサルがどのような目で見たから、ガリアが、ガリア人がそうであったのかは一切不明である。そこでプレニウスの『博物誌』によってその欠を補いたい。⁽¹⁹⁾

プリニウス (Plinius Secundus Gaius) は『博物誌』の訳者中野定雄・中野里美・中野美代氏によると、紀元前23年もしくは24年に北イタリアのココム湖畔 (現コモ市) に生れ、79年8月24日のヴェスヴィオ火山の大爆発の時、艦隊をひきいて火山に近づき観察中殉職した人物で、77年に完成した37巻は、自らの47年ゲルマニアにおいて軍務についた時に見聞したものをはじめとして広く当時の資料蒐集を行って、当時の百科全書として最高の2万項目に及ぶといわれているものである。

まず最初に検討しておかねばならないことの1つは、時代的に言って後のローマン・カソリックの故地ローマとの関係で出てくるキリスト教との関係である。一般に言われているように、イエス・キリストはB.C. 4年頃に誕生し、A.D. 30年頃エルサレムの城壁の外で十字架の刑に処せられた。弟子たちはイエスを約束された「メシア (救世主)」 (ギリシア語の“キリスト”のヘブライ語形) と考えるようになり、人間はキリストを通じて、神と親しく交わる機会を与えられたとキリスト教徒は考えている。

また、ルカとマタイの記述によると、イエスはベツレヘムで生まれ、A.D. 26年30才頃従兄弟であるバプテスマのヨハネから洗礼を受けたが、その後ガリラヤで宣教をはじめた。イエスの教えは挑発的な直截さをもっていた。彼は人々にユダヤ教の律法の文字から離れ、その精神に向かうようにと呼びかけた。このため彼は当時のユダヤ教の指導者たちを厳しく批判することになった。このためイエスへの民衆の支持は騒擾を招きかねず、イエスは自らの生命が脅かされていることに気づいていたであろう。A.D. 29年頃、ユダヤ教の過越の祭を祝うためにエルサレムを訪れ、神殿内の両替商と商人に物理的な妨害を加えることで敵に自らを逮捕させる機会を与え、警護兵に捕えられ、ユダヤ教の指導者たちはイエスをローマのユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥスに引渡し、ゴルゴタで十字架刑に処することになった。⁽²⁰⁾

事実がこのようなであれば、時代的には直接キリスト教の影響を受けることはありうるが、宗教関係は史実と事実とが明確でなく、多様性があり、特にイエス・キリストの場合は正統派のユダヤ教徒であったわけで、宗教上の記録と伝承から史実を明らかにすることは難しいであろう。そこでプリニウスの『博物誌』の中に影響されたかどうかを見ていきたい。

『博物誌』巻5には次のような記載がある。

「神といえども全能ではないということである。なぜなら、たとえば、彼が自殺しようとしてもそれはできない。ところがこの自殺というものは人生のあらゆる刑罰のうちで神が人間に賜った最高の恩恵なのである。……また、神は過去の事柄についてはそれを忘

れさせること以外は どうする力ももっていない。⁽²¹⁾」として極めて醒めた理性的理解を示しており、少なくとも前半部分についてわかるようにキリスト教的な思考はしていないことがわかる。なぜなら、キリスト教は教義として自殺は神を冒瀆するものとしているからである。

次はカエサルがエトルリアの項で述べたそこの住民についてである。エトルリアはウンブリア人がペラスギ人によって追われ、ペラスギ人はまたリュディア人によって追われるという歴史をたどり、リュディア人は王の名称をとってテュレニと呼ばれていたが、後に彼らが生贄を供える儀式を行うことから、トウスキと呼ぶようになったと説明しており、エトルリアの人々が当時生贄を儀式として行っていたことを知ることができる。⁽²²⁾ エトルリアはイタリア西部の地域名称である。ただ、これ以上のことは述べていないことは、プリニウスも、カエサルの如き遠征將軍という職務ではなく、博物学者としての職務に忠実にさめた目をもっていたとはいえ、共にローマ人としての誇りのようなものがあつたからであろうか、この点での考慮は必要であるように思われる。

今1つはローマの南のカンパニアの内陸部の事実について述べられていることである。ウァレリウス・ソラヌスが国の福利のために宗教的に守られている秘密をもらした時、直ちに罰金を支払ったが、この宗教的おきてを示すものとして、12月21日に生贄が捧げられるアンゲロナ女神は口にさるぐつわをされた像を現わしていることでもわかるだろうと示唆的にのべている。⁽²³⁾ また、現在のローマの地域にあたる所に当時いた部族はアルバという丘で「肉を受ける 犠牲をとにもする ことを習慣としたアルバという人々が住んでいたが、そのアルバと称せられた53の種族も滅んでしまった。」(種族名は省略)とのべている。⁽²⁴⁾ この場合何の肉であるかが書かれていないが、わが国で言えば現在まで供犠として残されている共食儀礼に当たるものであろう。

以上のようにプリニウスは当時にあつてはめずらしく科学的思考の特主であつたといわれるが、犠牲特に人身御供については詳細を語っていない。その中にあつて「イタリアの魔術」の項で述べられたヶ所がある。すなわち、「人身御供を禁ずる元老院の決議案が初めて通過したのは建国657年(紀元前97年)、グナエウス・コルネリウス・レントゥルスとプブリウス・リキニウス・クラッススが執政官であつたときのことだ。したがつてその時までそうした忌まわしい儀式が行われていたことは明らかだ。⁽²⁵⁾」と述べている。これはわが国に当てはめて考えると後に述べる大化2年(646)のいわゆる「大化薄葬令」に相当するものと考えられよう。このことはカエサルと同じような思考でプリニウスもま

たイタリア諸部族の間にもあった犠牲 人身御供 についてみていたことがわかる。

プリニウスは同じ「イタリアの魔術」の題名のそれにつづく「魔術の欺瞞をあばいた」「マジ僧たちの欺瞞」とつづけ、後者の項では、「神々は、そばかすのある人々の言うことはきかない」とマジ僧は言うが、これは皇帝ネロに対するマジ僧の異議であったろうかと発問し、ネロはからだに（そばかすを指すか）欠点がなかったとのべ、ある時、マジ僧を尊敬していたティリダテスが、彼（ティリダテスか）のためにアルメニアからの凱旋式に出席するために皇帝ネロのところへ行った。ティリダテスは船で航海して凱旋式にネロを出席させることはマジ僧たちは海に唾を吐いたり人間の生理現象で海をけがすことは罪だと考えていることによってことわるためである。しかし、ティリダテスはマジ僧と一緒にその式にやって来て、その饗宴にネロを入会させた。（イタリアの土着宗教はその他の、例えばミトラス教やエレスウスの祭儀にみられる宗教をも含めて神秘主義的な宗教であるため入会（イニシエーション）しなければ饗宴への参入はできなかった）。ネロはこのマジ僧に王国を1つ与えたにもかかわらずマジ僧から魔術を習得はできなかったことを例として、プリニウスはマジ僧の魔術は厭わしい、空虚な欺瞞であるとのべているのである。⁽²⁶⁾

プリニウスがなぜここでマジ僧の欺瞞性を述べなければならぬかは明らかでないが、マジは宗教の1つで、古代ペルシアの祭司階級であるマグにもとずく名称で、ダレイオス1世の碑文によれば、カンピュセス王のときマジ僧ガウマータが王の弟バルディアの名を冒してメディアで叛乱を起し、王朝の覇権を奪おうと計ったが、ダレイオス1世はこのマジ僧ガウマータを討ち、彼の破壊した神殿をペルシャ人のために修復したとのべているので、ギリシア・ローマ時代には、マジは「東方」の知恵と同義語に用いられたほどの名声を博していたけれども、その東方ペルシアでは土地の宗教との軋轢が生じ、神殿を破壊するという事件があったものと推測されるのである。⁽²⁷⁾

プリニウスは前述の『博物誌』の「イタリアの魔術」の中の「マジ僧たちの欺瞞」の中で述べられた文について訳者は「当時ローマ世界第1級の知識人であったプリニウスも、……彼ら（マジ僧）たちの言っていることは欺瞞だといいいながら、そのマジ僧たちの言っていることをそのまま引用しているのです。⁽²⁸⁾」と述べている。どうしてここに指摘されているようなことが起るのであろうか。

ガリアにおいてもイタリアにおいてもこの当時の在来宗教は聖職者がその支配と継承に当たった。ケルト民族のガリアにあってはドルイド、先にあげたマジの場合はマジ僧であっ

た。言うまでもなく、ギリシアでもあったであろう。しかし、その差異は文字をもつか持たさなかったかである。

『ガリア戦記』の場合では僧侶のところへは「その大きな特典に心を惹かれて多くのものが教育を受けに来て、」……「そこで沢山の詩を暗記すると言われている。こうして或るものはその教育に二十年間もとどまる。その教えを文字に書くのはよくないと考えているが、他の事柄は公私の記録でギリシア字を使っている。⁽²⁹⁾」つまり、これらに在来宗教の聖職者が文字を持たさなかったのである。このことは多くの在来宗教のもつ特質でもある。先にあげたカンパニアの内陸部について述べた「国の福利のために宗教的に守られている秘密を漏洩した時に直ちに罰金を払ったが、これは沈黙を教え込むための宗教の例として12月21日に生贄が捧げられるアングロナ女神が口にさるぐつわをされた像で現わされている」⁽³⁰⁾ことを指摘しておきたい。

時代の如何を問わず密儀を伴うことは通例である。上述のことはその反面を表わしているといつてもよい。アレクサンドロス大王の時代からコンスタンティヌス帝の治世までの7世紀にわたって地中海文明の宗教の1つとしてイギリスからシリアまでのかつてのローマ帝国領に、生贄の項でのべる雄牛を殺す若者の姿を表した絵画・彫刻を出土する地下神殿の遺跡が考古学者によって発掘されている。これはキリスト教とほぼ同時期に起った諸宗教の中で最も重要なものの1つであるミトラス教の遺跡であることが明らかにされている。⁽³¹⁾

英語のmystery（神秘）やmysticism（神秘主義）と語源を共にするミトラス教は紀元前1世紀にはじまり、ギリシアの歴史家プルタコスが紀元前67年までにギリシアの海賊たちがこの祭儀で行っていたと記されているといわれている。小アジアを本拠地とする海賊はおおよそ2万人、最盛期には地中海全域に及んだといわれており、3世紀を頂点に、4世紀にはキリスト教にとってかわられたという。秘密を守ることを義務づけられたイニシエーション（入信のセレモニー）を経て参入できるものであったが、構成員には兵士（海賊）・官僚・商人で女性は許されなかった。このミトラス教は古代イランの神ミトラの祭儀を導入したというキュモンの説もあるが、最初の問題の発端の考えに立てば、カエサルのはローマ人を代表する考えであり、この考え方は同じローマ人のプリニウスにも通ずるものがあり、ガリアのケルト民族とは異ったものであることはほぼ確かであると言える。その根本的な相違はローマ人としてのカエサル・プリニウスは共にギリシア人と共通性をもっていることである。一般に言われているギリシア哲学の系統をひくという点

である。この考え方は端的に言えば当時の科学的考え方の天文学・暦学に結びつくものと考えられる。

次に指摘したいことは宗教の階層構造・職業構成である。このことは宗派が特定の職業と結びついて現在もみられることと考え合わせれば首肯できるであろう⁽³²⁾ さらにそれが捧げられる神とも結びついていることである。

ニニオン・スマートによれば、ローマの宗教は畏怖を引き起こす神秘的なもろもろの精霊を集的にヌミナとよぶことができるが、その神々は主ユピテル（ジュピター）、その伴侶の女神のユノ（ジュノー）、軍神マルス、愛の女神ウェヌス（ヴィーナス）、豊作の女神ケレス、専門的な職能神として、除草の神サラトル、敷居の神ヤヌアリウスなどがあつたとされる。これらの神々は竈の女神のウェスタの女神を含んでさまざまな階層の祭司が最高神官のポンティフェクス・マクシムスを頂点に構成されているが、戦士に関係のある武器や馬が剣闘士や戦車競技の神と共に宗教的な意味を担っており、またさまざまな占師もいたといわれる。⁽³³⁾ これらの神々を祭る宗教はローマ世界の拡大と共に文化的にギリシアに接触するようになり、そのためにユピテルをゼウス、ウェヌスをアプロディーテと、ユノをヘーラとなど、ギリシアとローマの神々を自由に同一視する傾向になり、ローマ人たちがギリシアと東方ヘレニズム文化を圧倒したとき混合されたギリシア＝ローマ文明が生まれることになったと理解されている。⁽³⁴⁾ それ故先にあげたプリニウスの『博物誌』にあげた例もこのような宗教的位置づけの上で考えねばならない。

3. ケルト民族の生贄の方法

ケルト民族の生贄のやり方の部分について補足的に述べたい。カエサル『ガリア戦記』では具体的には「大きな像を作って、その細枝を編んだ四肢に生きた人間をつめ、火をつけて焔でまいて人を殺す。」と説明している。Frank Delaney “The Celts”（邦訳 フランク・ディレイニー著『ケルト - 生きている神話』）では「定期的に生贄の儀式が、人形を木の枝で編み〔ウィッカー・マン〕、なんとそこに生きた人間を詰め込んで火をかける。」という形で行われるとのべている。ディレイニーはさらにストラボンにより、「人身御供には他にもいろいろなやり方があつた。たとえば、弓で射殺す。神殿で串刺しにする。わらや枝を編んだ巨大な像を作り、牛やあらゆる種類の野獣と人間と一緒に閉じこめ火あぶりにする。（略）生贄を後ろから短剣で突き殺す。このとき犠牲者が身もだえするのを見て、未来を占うことも行われた。こういう祭祀には必ずドゥルイド僧が立ち会った。⁽³⁵⁾」こ

とが追加されている。カエサルの部分についていえば、例えば、人形に人をつめて焼き殺すのは目撃したシーンであると記していることとして書かれているので、若干の補足がつけ加えられているが、人形に人をつめて焼き殺す図が、ウィッカー・マンの想像図であることはわかるであろう。

プリニウスはカエサルよりもやや詳細に具体的のべている。即ち、めったにみることがないカタガシに生えているヤドリギが見つかる、いわゆるケルト民族の特有のドルイドによるセレモニーを以て採取されるが、とくに月の第6日（それはこれら諸種族にとって月および年の始めをなすのである）に、そして新世代が30年経つごとである。（ママ、意味が明確でないが、30年後にの意味か）というのはその時にでもそれは強さを増しつつあり、生長しきった大きさの半分もないからである。「あらゆるものを治癒する」という意味の土地の言葉で月を歓呼しながら、彼らはある木の下での生贄の式と饗宴の準備をし、2頭の牡牛を連れて来る。その角はこのめでたい折に初めてくくられる。白い法衣を着飾った1人の僧侶がその木に攀じ登り、金色の鎌でそのヤドリキを切り落とす。するとそれは白い外套の中に受け止められる。それから最後に、それを賜った人々は情深い賜物を授けられるよう神に祈りながら生贄を殺す、と記されている。⁽³⁶⁾ところが同じプリニウスの『博物誌』からの引用としたクリスチアーヌ・エリュエールの『ケルト人』では「樹木の下に犠牲と饗宴の準備をし、白牛2頭を連れてくる。まず、牛の角同士を結び合わせる。（中略）犠牲獣は、それを神に捧げることで慈悲を得られるよう祈りながら屠る⁽³⁷⁾」となり若干の違いがある。特に生贄とする牛が牡牛であることとそれが白色であることはグローバルにみた場合には文化人類学的に見る場合に明らかにしなければならない事項に属するが、いかなる理由で補足あるいは訂正をしたかの解明の手だてをもたないのでその指摘を行うだけにとどめたい。

フランク・ディレイニーはケルト民族の生贄の例として上述以外の場合をあげている。即ち同じ「ケルトの祭祀と供犠」の中で「ラ・テーヌ文化」以上の遺物が発見されており、その中に犠牲に関するものも含まれている。氏のあげた例をあげることにする。⁽³⁸⁾

(1) 北ウェルズの西の突端のアングルシー島の英国空軍基地になっているスリン・ケリッグ・バッハ。1943年空軍飛行場建設中に発見。元あった小さい沼から捧げ物が水中に投込まれていた。戦車・馬具、武器、食器などの他、牛・羊・豚・犬の骨が出て、これは動物を生贄に捧げていたものだろうという。

(2) ブタペストの南のヴェレンス湖。子どもから20代初めの若者、中年女性、老人まで

水流のわきに掘られた生贄用の穴から。犬の骨、鹿の枝角など湖水から。

- (3) イングランドのサリー州ユール。19世紀半ばに発見。深さ4m～12mの8本の祭祀用竪坑から。頭と体が別々になっている大きな犬の骨。焼けた人骨。大量の焼かれていない雄鹿、猪、野ウサギ、牛、羊など。
- (4) イングランド、ノーフォーク州アシルで発見の、(1) 1m四方12mの深さの穴と、(2) 6mまで掘下げた穴。雄牛と鹿の骨、壺。
- (5) ノーサンプリアのキャローバークというところの井戸。女神コヴェンティナに捧げた人の頭蓋骨、腕輪などと1万数千枚のコイン。
- (6) スコットランド、3mの井戸の中から直立した男の骸骨。小人の骨と槍も手近に。ケルト人が吉兆を占うのに使った大ガラス、ノスリ（鷹の一種）、オンドリと野ウサギ。
- (7) バイエルン地方の竪坑、深さ50m、人間の肉や血痕。

以上のように竪穴もしくは井戸の中から生贄にされた人骨が出ている場合が多いが、(3)のイングランドのサリー州ユールの場合のように焼いた人骨が出ていることは注目される。

4. インドの犠牲

インドに関しては、ミルチア・エリアーデが『世界宗教史』の一環として、『リグ・ヴェーダ』を中心に詳細な文献の分析を行いまとめている。エリアーデはインドのヴェーダ時代の記録をインド・イラン系の民族にみられるアーリア人に共通してみられる文化とし宗教学的見地だけでなく、文化人類学的見地をも合せたアプローチを行っている。エリアーデの研究は広範な領域にわたるが、ここでは直接関係のある生贄（犠牲）に関する事項についてのみ取出してみることにする。従って供犠の中でも人及び動物以外のものは除外した。

犠牲獣としては山羊・雌牛・雄牛・雄羊・馬などがある。中でも氏があげているヴェーダ時代の最も重要でかつ有名なのは「馬の供犠」⁽³⁹⁾のアシュヴァメーダである。これは戦争に勝ち、世界全体の支配者としての地位を得た王に限られ国全体の穢れを潔め、豊饒と繁栄を保證するために行われるもので、準備のための式典1年を要するものである。やや煩雑になるが、当時の社会一般に行われているものと異なるので敢えて紹介したい。1年間にわたる準備期間に「1頭の雄の競争馬が他の100頭の馬とともに自由な状態におか

れる。400人の若者が、この馬が雌馬に近づかないように見張る。儀式自体は3日間続く。2日目にある特定の式典のあと（競走馬に雌馬を見せ、その馬を戦車につなぎ、王子が池の所まで連れて行く等）多くの家畜が犠牲に供される。最後に、競争馬はこれ以降、みずからを犠牲としたブラジャーパティ神の化身となり窒息死させられる。」それぞれ100人の女性の従者を従えた4人の王妃たちが屍体のまわりをとり囲み、王妃が屍体の傍らに並んで横になると「覆いがかげられ、彼女は性交の真似をする。この間祭司と他の王妃たちは猥褻な冗談を交しあう。王妃が立ち上がるとすぐに馬をはじめとする犠牲獣は解体される。」

これにつづいては「人の供犠」が行われる。動物犠牲のほかに、バラモンもしくは雌牛1000頭と馬100頭の値段で買われたひとりのクシャトリアが犠牲に供された。彼もまた1年のあいだ自由を与えられ、殺されるとすぐに王妃がその屍体の傍らに添え寝をした。人の犠牲はプルシャメダと呼ばれるが、「犠牲の殺害を規定しているのはシャーンカーヤナとヴァイターナの2書のみで、その他の典礼書によればその人間は最後の瞬間に解放され、動物が彼の代わりに犠牲に供せられる。」

なお、エリアーデはこのようなことがゲルマンの伝統のなかに驚くべき類似例をもっておることを書いている。すなわち、槍で傷つけられ9夜のあいだ世界樹に吊り下げられたオーディンは知恵を獲得し、魔術をマスターするために「みずからをみずからへの」供犠とする（「オーディンの箴言」）とのべると共に、11世紀のブレーメンのアダムによれば、この供犠は9年ごとに9人の人間と、ほかに動物各種を供犠として木につるすという形でウプサラにおいて再現されていたという。

犠牲ではないけれどもものべてあることで指摘しておきたいことは火に関する供犠の中で、家庭の火の祭祀上の役割が、インド・ヨーロッパ諸民族の時代からすでに重要であったことの指摘である。アグニ神が火の神聖性を代表し、天に生まれ、そこから稲妻の姿で地上に降るが、太陽とも同一視されている。⁽⁴⁰⁾このことは火が人類にとって重要な役割を演じているために、火の神として信仰の対象となっているばかりでなく、インドの場合はアグニと呼ばれる神が闇黒を追い散らし、悪魔を追い払い、病や呪いから守る関係にあり、火性の要素と水性の原理との結合によって、アルカイックな宇宙論的な思弁の中にあることの指摘である。ここでは犠牲を問題としているので具体的に火と犠牲との関係の部分を利用・ルヌー『インド教』の中から取出すことにする。「ヴェーダの宗教儀礼は供犠にもとづいている。神に捧げる恭々しい尊敬のしるしとして、供犠は、多かれ少なかれ儀式の

形をとって行なわれ、火の神に供物を供える儀式を頂点とする。その目的は神々の世界と交渉をもつことであり、一般的な、もしくは特別の何らかの利益を得るために神々の助力を確保することである。」「供物は、あるいは（多くの場合）農産物もしくは畜産物 米や田の穀物、牛乳、「溶かしたバター」、あるいは肉のいけにえ（ふつう牡山羊）である。この供物の一部分は火に投込まれ、他の部分は祭官と、自分のために供犠を依頼し祭官の協力を求めた信徒の「祭主」とによって消費される。⁽⁴¹⁾」この祭祀に準ずるのが動物を犠牲として供え、牡山羊を（窒息させて）いけにえに捧げる供犠であり、最も壮大なものが先にエリアーデが取り上げたアシュヴァメーダ（「馬祀祭」）が位置づけられる。⁽⁴²⁾火を用いる意味については「供物を神に伝えるのは火である。供犠は、「祭壇の役目をする浅い穴のまわりに配置した三つの火の助けによって行われるのが普通である。」と述べているが、これはケルト民族にみられる生贄のやり方である、柳の枝であんだ人形に人や動物を入れて火をつけて犠牲にすることと考えなければならないであろう。なぜなら、両者について直接的に具体的に事例で結びつけていないけれどもルイ・ルヌーは『インド教』の冒頭において「ヴェーダの宗教は、アーリヤ人が、紀元前二千年から同千五百年のあいだにインド北西部（パンジャブ、インダス河上流の流域）に侵入したときに、彼らもたらした宗教である。ヴェーダの宗教の基礎は、「インド＝イラン」的と特徴づけられる要素にまでさかのぼる。」として、神々の階層をなすことと共に、「火」の崇拜、動物をいけにえとして神に捧げること⁽⁴³⁾」などをあげているからである。このことは主題と最も関係のある1つであることを指摘しておきたい。

5. 表意文字としての漢字と犠牲

イキニエは通常生贄の字を用い、「^{ショウレイ}生類、生ケナガラニ、贄トシテ、神ニ供フルモノ。」とし、倭名抄、十三四祭祀具「犠牲、伊介邇倍」と『大言海』にはあり 贄は御贄という言葉に現在でも残っているように、もともとは神へ供えるものの義であったが、転じて朝廷へ奉るもの、その土地の産物、特に食用の鳥、魚などを指すようになったとある。この「生ケナガラニシテ」については2通りの解釈がある。⁽⁴⁴⁾1つは折口信夫説の、「イケニへ（生贄）で犠牲の意ではなく、イケは活け飼いにする意」、今1つは西郷信綱説・柳田国男説の「生贄に指名されたら其日より1年の間に養ひ肥やして次の祭には殺して神に捧げる。」とする説とがあり、「生け」の解釈について意見が異なっている。前者を説明するものとして、神社の境内で放し飼いにする様式は血臭を嫌う日本の特殊なもの

と考えるべきで、英語の犠牲と結びつけて考えられるように転化したものである⁽⁴⁵⁾と高木智見氏はのべている。つまり、犠牲と同義に用いられていることである。

本来漢字は中国で生まれた表意文字であるからその出来た時代を同定することは難しいが、中国ではじめて用いられるようになったのは、牛篇であることから、牛をイケニエには用いたものであったことは疑う余地はなからう。中国は広大な国土をもつ国で、南船北馬の言葉が示すように、中南支は珠江・揚子江等の沖積平野からなる水田を中心とした地域であるのに対して、北支は黄河流域を中心とした黄土層の堆積した平野の畑作地域からなっている。それ故、家畜文化からいえば、中南支の水田地域は東南アジアの水牛及び牛の系統を引き、北支は馬・羊の系統を引く地域である。

もっともこの考えには前提がある。1つは文字として表わされるに至った時点で、この漢字を作った民族が使用していたということである。また、もう1つは犠牲が民族の恒常的習慣になっていた時期には視点の違いがあるということである。栽培植物と家畜の起源を論じたE・アイザックは、「ウシが最初に家畜化されたのは南東ヨーロッパで、そこから家畜化を行った人々とともにアジアへ移動していったのか、それともこのパターンが逆方向であって、いまだにアジアで初期の遺跡が発見されていないのか、また、おそらく交易のために旅行した人々や、他の人々が家畜を行なっていることをみて、ウシの家畜化の独立の中心地域を形式したのかどうか、今はわからない。」と述べている。⁽⁴⁶⁾ また、「捕獲された原牛は囲いをめぐらされた草地で供犠用に飼われた。この供犠用の牛は近親交配の多い中で、野牛とはちがって頭部が小さくて脚が長く、脊が比較的まっすぐであるというような、より幼児的な特徴をもち、」「神の再来として長い角をもつ成牛が選抜されることとなった。⁽⁴⁷⁾」これに対して、馬については供犠に関して何も述べていない。家畜としての馬は、牽引のためと戦車に利用されていたにすぎない。ただ、ウマについては王家の儀礼用に重要であったことの他は見出せない。また、ウマは「ハラッパとモヘンジョダロのインダス河文明やシュメール人の古い遺物にはウマはみられなかった⁽⁴⁸⁾」ことは馬がイケニエとしての供犠の用例のないことと共に示唆的である。

ここでは用字法上からイケニエを見ることにしたい。⁽⁴⁹⁾ 漢字の世界では犠牲の字に示されるように牛を以て第一とすることをあげたが、このことはこの場合に止まらない。イケニエは犠について「宗廟に供へる牲」と『説文』にもみえるように本来は牲の字に意味があた。特に中国で牛が重視されたことは〔禮、曲禮下〕「天子以ニ犠牛ニ。犠、純毛也。」とあり、純毛とは「牲」の項に「牛純色」を言い、牛の毛の1色のもとをさして、

『周禮』でも「凡時祀之牲，必用=牲物-」とある。牲物とは毛色が1色で體の全い牛をさして用いる言葉である。ここに上げられている説明を総合すると、純色とは毛の1色のもので、祭祀の犠には必ず牲物と称して毛の1色のもので體の全い牛でなければならないと定められていることである。しかし、純色の意味が通常考えられている白色でないことは、どこにもその言葉が用いられていないことでも明らかであろう。この意味は「體の全いもの」の一環として色も考えられていると見るべきで、それがいけにへの字の牛篇の全に表された言葉と解すことができよう。白色であることは混りようがない色ということで儀式・祭祀用に用いられることが多いのであろう。この白色については鉄井慶紀氏が、直接的に犠牲だけを問題としたのではないが、「中国古代における白色崇拜について」で使用例を蒐集網羅し、殷民族に特有のものであって、他の色調に比べて白色は殊に好まれた色であり、「卜辞において、白牛白豕などが祖先祭祀の犠牲として用いられている事実は、白色が殷において、宗教的意義を有することを示すものといえ得よう。⁽⁵⁰⁾」と述べている。つまり、犠牲としては白牛が最上のものであるといえるであろう。

中国古代の犠牲は牛・豕に限らない。その上に何を犠牲とするかには格式があった。周禮、天官、宰夫、には「三牲牛羊豕具爲=一牢-。環=山於有牢-。牢，牛羊豕也。以=大牢-祀=于高禴-。三牲具曰=太牢-。諸侯之祭、牲牛曰=太牢-。」〔儀禮、少牢饋食禮〕升レ牢。」つまり、牛羊豕を三牲といい、これが太牢、羊豕の二牲を少牢と言う。また、祭りの時、犠牲の純色な者を滌宮に養ふこと三日の後、始めて生獻するという。また、牲にやしなっているいけにへ、という意があることから、どの地域に於いても犠牲にする前に養い肥させるということがあったことがわかる。饗餼に「殺したいけにへと生きたいけにへ」とあるので供犠として殺したのも供へられるように後にはなったものであろう。もちろん獣の子孫をたやさないために「犠牲母レ用レ牝」とあり天地宗廟の祭には常に牝を用ひないこと孟春の月、山林川澤を祭る時も牝を用ひない。餘月には皆牝を用ひることが言葉として残されている。また、海録碎事、帝王、郊祀に「梁天監中、祈=告天地宗廟-、以=去レ殺之理-、欲レ被=之含識-、郊廟牲牲、皆代以レ麩」とあり、梁の天監年中（502 - 19）に麩を供へることで代用することになったという。⁽⁵¹⁾

以上から漢字の世界からみると次のことが言える。

- (1) 中国では犠牲として牛・羊・豕が用いられ、それには格式の差があったこと。
- (2) 犠牲には純色のもの、すなわち、毛色が1色で、まだらでなく、體の全いものが扱われたこと。

(3) 犠牲に捧げられるには滌宮に3日間養って後になされること。

(4) 犠牲に牛・羊・豕を殺すのは梁の天監年中のA.D.502～19年に改められ麩に切りかえられることになり、饗餼という生きた犠牲と共に殺した犠牲も祭られる言葉ができたと思定されること。

などをあげることができるが、中国の漢字の世界からだけでは馬は説明としては散見するが第一義的には使用上されていないことがわかる。

6. 日本の生贄

日本の場合においても犠牲の具体的事例については『大言海』をはじめとして辞典・事典の類にあげて説明がなされているので、ここではこれまでの論の展開の中で必要な事例を取出してみよう。

最初に挙げられるのは通常孝徳天皇の大化2年の薄葬令である。「凡王以下、及至庶民、不_レ得_レ營_ルヲ_レ殯、凡自_二畿内_一及_二諸国等_一、宜_ク定_ニメ_一所_ニ而使_ニメ_ヨ收埋_一、不_レ得_三汗穢_シク散_ニ埋_ルヲ_レ處々_ニ、凡人死亡之時_ニ、若_ハ經自_レ殉、或_ハ絞_レ人_ヲ殉_ハシメ、及_強殉_ニ亡_シタル人之馬_ヲ、或_ハ為_ニ亡_人ノ、蔵_ニメ_宝ヲ_於墓_ニ、或_ハ為_ニ亡_人ノ断_レリ髮_ヲ刺_レシテ股_ヲ而誅_ス、如_レ此旧俗、一_ニ皆悉_ニ断_一、」⁽⁵²⁾

この令の記事は取出した部分以外を含めて検討すべき点があるが、ここでは生贄に関するのみにとどめたい。当時にあつては人が死んだ時に殉死することがあったこと、殉死させることがあったこと、その方法は^{ワナギ}經または^{ワナギ}絞という方法であること、その死んだ人の馬を殉じて殺したこと、殉死ではないが、死んだ人の為に髪を切ったり、股を刺すという方法で死んだ人の為に葬送儀礼を行なったことが明らかである。

經と絞については朝日新聞社版『六国史』によれば註として、同じ訓「ワナギ」を与えているが絞の項では「強ひて殉死せしむるなり」とあるので⁽⁵³⁾殉死する經と殉死させた絞とを使い分けたのかも知れないが、漢字の使い分けでなくとも文意からも差異を読み取ることができる。いづれにしても殉死の方法は首をつる方法が考えられよう。「股を刺く」の注については「此以外に見えず如此して殉死に代へしにや集解に魏志倉慈傳曰西域諸胡聞_ニ慈_レ死_一悉_共会聚_ヲ哀_レ或有_ニ以_レ刃畫_レ面_以明_ニ血誠_一と見ゆ此類か」としている。刃を以て面を畫くとはどういうことか明らかではない。

次に史料上は若干の問題があるかも知れないが、敢えて『古事記』倭日子命の項を取上げたい。「倭日子命 此王の時、始めて陵に人垣を立てき。」とあり、岩波書店版『古事

記』はその補注として、⁽⁵⁴⁾「人垣については、皇太神宮儀式帳に「立先・宜、次宇治内人、次大物忌父、次諸内人物忌等、及妻子等、人垣立」とあり、止由氣宮儀式帳にも「人垣仕奉内人等、并妻子等、惣六十人。」とある。ただし倭日子命の場合の人垣は、御陵の周囲に多くの人を立て並べて埋めたのである。垂仁紀二十八年十月の条を見ると、「天皇母弟、倭彦命薨。十一月丙申朔丁酉、葬=倭彦命于身狭桃花鳥坂。 (ムサノフキサカ) 於是集=近習者、悉生而埋=立於陵域。数日不=死、昼夜泣吟。遂死而爛鼻之、犬鳥聚瞰焉。天皇聞=此泣吟之声、心有=悲傷。詔=群卿曰、夫以=生所_レ愛、令=殉亡=者、是甚傷矣。其雖=古風之、非_レ良何從。自_レ今以後、議之止_レ殉。」とある。ところで延佳本には、この書紀の記事に基づいて、原文「於陵立人垣」の上に「止」の字を補っているが、これはさかしらである。これについて記伝には「或人問、書紀には殉は古風とあると、此記に此王之時、始立=人垣とあるとは、其説表裏なり。然れば延佳本の、止字あるぞ宜しかるべき。此事いかが。答、延佳書紀を悪く見誤れるものなり。熟見れば、書紀の趣も、此記と異なること無し。其故は、生人を殉埋むるは、いと古よりの風なりしかども、人垣を立ばかりの甚しき事は、いまだ例なかりしに、此王の時、殉をこよなく多くして、始めて人垣を立てるに至りしなり。(中略)書紀の趣も、前々の例には異にして、^(ママ)甚しかりしさに聞ゆるをや。然るに若止字ありては、返て書紀の趣にも違へり。如何と言に、自_レ今以後止_レ殉とあるは、此王時、あまり殉職の甚しかりしに因て、後來止むと命へるにこそあれ。此王を葬る時に、如此命ひて、此事止たるには非ず。然るに此王之時止とはいかでか言む。」と述べている。」と。補注の論議はほぼ盡くされ⁽⁵⁵⁾ といつてよいが、ここで当時の記紀の編集に当たっての意識に次のことがあったことは確かである。『日本書紀』皇極天皇の条に百済の弟王子の兒翹岐^{ケウキ}の記事がかなり頻繁に見られるが、その中に、同元年5月21日に翹岐の兒が死去するが、喪に臨まないことをみて、百済・新羅の風俗は父母でも看もしない、「無慈之甚、豈別=禽獸、」と葬送の儀がなかったことについての慈悲の無さにあきれている。このことを考えると止むと殊更につけ加えることはないように思われる。

人垣は「皇太神宮儀式帳」及び「止由氣宮儀式帳」にもみえる。「皇太神宮儀式帳」では年中行事と新宮遷奉時儀式行事とに分けて行事を記録しているが、その中の後者の中に「人垣仕奉人等召集。即衣垣。衣笠。刺羽等乎令持。人垣仕奉男女等。太玉串令持棒。(後略)」とあり、また、「遷奉行幸時。立先・宜。次宇治内人。次大物忌父。次諸内人物忌等。及妻子等。人垣立。衣垣曳。(以下略)⁽⁵⁶⁾」となって遷官行列の順

序が記されている。「止由氣宮儀式帳」も同じ様式により記され、「新宮遷奉時用物」として「人垣仕奉内人等。并妻子等。惣六十人男卅人。女卅人。給明衣六十(領)令。⁽⁵⁷⁾」(以下略)とあり、一般にはこの人垣の用例が『古事記』と同様にあつかわれているが、「皇太神宮儀式帳」の中に「己上奈良朝廷御世定祝」とあるように儀式を定めたものでそのまま人垣が生贄として行なわれたとは考えられない。現在では形象埴輪、中でも人物埴輪は殉死の代用としては実態にあわないといわれているが、中国の秦の兵馬俑もあり、日本でも生贄が古墳造営に際して行われ、それが人垣と呼ばれていたであろうこと、その代用としての人物埴輪・動物埴輪が使われたことは考えられよう。

『宇治拾遺物語』119「吾妻人生贄をとゞむる事」(巻10, 6)⁽⁵⁸⁾は中山神社と高野神社とがあってそれぞれ中山神社は猿、高野神社は蛇を祭神として祭り、毎年の祭りに容姿端正で、髪が長く、色白い娘を生贄に捧げるところが昔から今に至るまでおこたりに行なわれていた。ある人の女がそれに選ばれたので親どもは泣きかなしんでいた。そこへ狩を業とする東国の人が出て来て生贄に出せば死んでしまうのだから自分にこの女をあづけてくれないかと頼み一計を案じて生贄を入れる長櫃に身代りとなって入り、飼いならした犬を使って猿神を退治し、いまより後はすべて人を生贄にはしないことの誓言を言わせ、その代替として猪・鹿にすることになり、東国の狩人とその女が妻夫となるという物語である。

この物語は『今昔物語』の中の『美作国神、依獵師謀止生贄語第七』⁽⁵⁹⁾にも同文的同話として収められている。人身御供の娘の身代わりになって猿神を退治するモチーフは『今昔物語』の「飛驒国猿神、止生贄語第八」⁽⁶⁰⁾にもあり、ここでは猿退治をする者が回国修行僧で舞台が隠れ里になっていること、生贄がみつからなかったら自分の娘を生贄としなければならない定めとなっているところの差異がある。最後はこの修行僧が猿を退治して毎年一回生贄をささげることがなくなり、修行僧もこの女も夫婦となり幸せになるという物語である。平安後期の仏法の論理の説話の中にあって王法の論理でわが国のこれら生贄説話の原型として考えられるものに『今昔物語』の「立生贄国王、止此平国語第卅三」⁽⁶¹⁾がある。昔震旦の□□代(中国の原典では魏文侯時)に□□(中国原典では西門豹)と言う人が有った。この王が国王となって行った時、国人に何か年内にあるかと尋ねたところ昔から今までつづいている大事なことがある。この国人が言うには毎年一度祭りがあがるが、この祭には家格の高い財産もある家の、15~16才の顔かたちがきれいで、未

婚の娘を選んで1年間精進潔斎し、翌年の祭の日に神宝をもってこの娘をかざり立て饗にのせて浜辺へ行き海へ船に乗せて沈めるといふ行事が行なわれる。これは海にいる神の御妻にささげるためであるという。翌年の祭りには王が来て例年以上にかざり立てた行事をしたあと、生贄をささげようとした時、王がこの祭を止めさせ、生贄の娘に差替え生贄行事を進めてきた^{カムナギ}巫にすると行って次々に海に投げ入れた。娘は王の妻となり、后となったという物語である。ここで『今昔物語』のような日本の説話になぜ震旦（中国）の説話が収録されるのかを説明するものとして『類聚三代格』巻19「禁制事」の延暦10年9月16日の太政官符「應_レ禁_ニ制_レ致_レ牛用_レ祭_ニ漢神_ニ事」をあげる。即ち、

「右被_ニ右大臣宣_ニ偈_ニ奉_レ勅_ニ。如聞。諸国百姓致_レ牛用_レ祭_ニ。宜_下嚴加_ニ禁制_ニ莫_上令_レ爲_レ然。若有_ニ違犯_ニ科_ニ故_ニ致_レ馬牛罪。」⁽⁶²⁾

これらの事例は牛を殺すことの目的が祭に使用され、それが漢神を祭るためであったことが延暦10年まで行なわれていたことがわかる。当時にあつて祭りにも使うことが禁ぜられるようになった大義名文として時代はさかのぼるが次の詔が明らかにしている。即ち、天平13年2月7日の「詔。馬牛代_レ人勤勞養_レ人。因_レ茲先有_ニ明制_ニ不_レ許_ニ屠_レ致_ニ。今聞。国郡未_レ能_ニ禁_レ止_ニ。百姓猶有_ニ屠_レ致_ニ。宜_下有_レ犯者不_レ問_レ蔭贖_ニ先決_ニ杖_ニ一百_ニ然後科_上罪。（以下略）」⁽⁶³⁾で田畑耕作のための役畜として使用価値があるためとしている。さらに、延暦23年12月21日の太政官符では、（前略）「今聞。無頼之^{ククヒ}流_レ争_レ事_レ驕_レ侈。致_ニ剥_レ斑_レ犢_ニ。竟用_ニ鞍轡_ニ及_ニ胡_レ録_ニ等_ニ之_レ具_ニ。爲_レ弊_レ尤_レ甚。事_レ湏_ニ禁_レ絶_ニ。若有_ニ違犯_ニ。科_ニ違犯_ニ。科_ニ違_レ勅_レ罪_ニ。」（以下略）⁽⁶⁴⁾とあつて斑犢を殺して皮をはぎ驕侈のためにその皮をきそつて用いていたことがわかる。しかも斑犢の皮で鞍轡や胡録などの具に供することは驕侈であるばかりでなく、そうした者は無頼之流（無頼の集団）であると桓武天皇の側近は評価していることがわかる。

次の『古語拾遺』の説話は白猪・白馬・白鶏を生贄として神に祭る起源について述べたものであるが、牛を殺して食べることとのからみを述べているので煩雑であるがそのものの全文をかかげたい。

「一昔在、神代に大地主神、田を営る日、牛穴を以て田人に食はしむ。時に御歳神の子、其の田に至りて饗に唾て還りて以て、状を父に告す。御歳神怒を發して、蝗を以て其の田に放つ。苗葉忽に枯損て篠竹に似れり。是に於て大神主神、片巫〔志止々鳥〕・肱巫〔今俗、竈輪、及び米占也〕をして其の由を占ひ求めしむるに、御歳神崇を爲す。宜しく白猪・白馬・白鶏を献りて、以て其の怒を解くべし。教に依りて謝り奉るに、御歳神答へて曰

く、「実に吾が意也。宜しく麻柄を以て拵に作りて之を拵ぎ、乃ち其の葉を以て之を掃ひ、天押草を以て之を押し、烏扇を以て之をあふぐべし。若し此の如くして出去らずは、宜しく牛穴を以て溝の口に置きて、男荳形を作りて以て之に加へ〔是れ其の心を厭ふ所以也〕、蕙子〔古語、蕙を以て都須といふ也〕・蜀椒・呉桃の葉、及び塩を以て其の畔に班置くべし」。仍て其の教えに従ふとき、苗葉復た茂り、年穀豊稔なり。是れ今の神祇官、白猪・白馬・白鶏を以て御歳神を祭る縁也。」⁽⁶⁵⁾

とある。難解な説話であるが、これを解く第1の問題は仏教が稲作を中心とする村落社会における年中行事に定着する以前の在来神御歳神の生贄としてみなければならぬということである。従ってここでは御歳神が怒を發したのは牛穴（牛の肉）を食うことが悪かったからではなく、御歳神への牛のささげ方が悪かったと解さなければならぬであろう。注釈に引用してあるように、「皇極紀」元年7月の条には雨乞ひをしても効果がないので「隨=村々祝部所教-、或殺=牛馬-、祭=諸社神-」⁽⁶⁶⁾とあるように牛馬を生贄とすることが村の大事があった時に通例であったわけで、神道として禁じられていたわけではない。従って前にあげた様に人の代わりに労働をするから殺すことを禁止するという太政官符がでるのである。この文が事実そのままを述べているとすれば、牛の穴を料理して田人に食わせ田へも供えるやり方が悪かったので、生贄としてささげられるものも純色である白色のものが選ばれ猪・馬・鶏の家畜・家禽が選ばれたものであろう。ただこの説話はもう1つの御歳神の祟りに対する対応策が述べられていることを指摘することも必要である。祟りとしての蝗に対して、麻柄で拵を作って蝗を落としたり、玄参で田の外へ蝗を押しやったり、烏扇（射子）の葉で蝗を扇ぎ出したりすればよいが、だめな場合は、蕙子（数珠に用いる芋珠またの名マシダマ）・蜀椒^{キハジカミ}・呉桃^{クルミ}・塩などを田の畔に置けというのである。これらの対応策の中特に指摘したいことは説話ではあるが現在も有効であろうと考えられることがあるということである。蜀椒・呉桃については、『類聚三代格後篇』所収元慶6年（882）6月3日の太政官符「一應=禁=流=毒捕=魚事」として「諸国百姓每=至=夏節-。剝=取諸毒木皮-搗碎散=於河上-。在=其下流-者魚虫大小拳=種共死。尋=其元謀-所=要在=魚。至=于虫介-無=用=於人-。」とあって毒流しの漁法があったことが知られるが、これは9世紀より後の13世紀まで胡桃流しの法の禁止が出されていることでもわかるように具体的な蝗退治の方法として有効であったことが知られる。⁽⁶⁷⁾

それでは、このような日本の在来宗教 = 神道の世界に渡来宗教 = 仏教がやって来た時にどのような論理が人々の間でなされたであろうか。この間の事情を説明するのが『日本霊

異記』の「依=漢神崇-殺レ牛而祭又修=放生善-以現得=善惡報-縁 第五」⁽⁶⁸⁾である。ここでは聖武天皇の時代に攝津国東生郡撫凹村のこととして語られている。即ち、異国の神の崇に対して禱るために、年毎に1頭づつ牛を殺して供えて7年がたち祭る期間を終えたので止めたところすぐに重病になった。ト者と呼んで祓へ祈禱をしたけれども病はますます悪くなる一方なので、これはきっと7頭の牛を殺したためであると思い欠かさず毎月生きている類のものを殺しているのをみれば買って放してやった。7年がたった臨終の時妻子に死んでも19日間焼かずにおいてくれといった。9日の後に蘇生して閻羅王の前で牛頭にして人身の7人の非人と買ひて放生せるものの恩義に集った千万余人とが議論をしたが、閻羅王は大分の理判を多数側にした。この者は閻魔王宮から帰ってからはいよいよ誓願を起こし以後は異国の神を祭ることをしなかったという物語である。

ここで注目すべきは生贄をささげる神は漢神であり、生贄を止めさせるのは仏教であることが現実にどちらを選択するかを問いかけていることである。また、ここでは漢神と仏教というように同じわが国の在来の神として語られていないことである。漢神は中国の神であり、中国では土の神を社と言い、穀物の神を稷と言って併せた社稷が国家を意味するまでに重視されたことは事実であるが土地を祀ることも穀物を祀る年中行事も世界のどの民族ももっている神概念である。わが国の場合も例外ではない。

『伊豫三島縁起』⁽⁶⁹⁾では「天神第6代面足尊惶根尊末孫代々異国敵誅伐目録」の中の64代円融院御宇永観2年(984)年閏3月21日。「書寫聖空上人湛然大徳相共。毎日生贄鹿一頭被中止。」「同和尚請講4巻経給尅。自天稻種子雨下。取其種子令耕作。至当代無断絶。毎年2月9日。号桜会御神夏。」(以下略)この記事は『大言海』にも収録されているが文意に明確さを欠くところがある。縁起の説話であることを考えれば、永観2年(984)3月21日に聖空聖人湛然大徳の僧によって次のことが書写されている。毎日鹿1頭を生贄に供されていたのを止めさせたこと。今1つは2月9日「桜会御神夏」というのがあって、天より稲種子の雨が降って来て、その種子をとって耕作するということが今までずっと続いているという神事の記録である。2月9日はいわば今日的に言えば春分の日 of 行事であり、ケルト民族ではイムボルクと呼ばれている祝日である。また、鹿を生贄とすることを仏僧によって止めさせたということが三島神社で行なわれたということは仏教以前の神事として鹿が生贄として恒常的に行なわれていたと解されよう。また、六畜と言われるものには馬・牛・羊・豕(豚)・犬・鶏を含むとされているが三島大山祇神社で鹿が生贄用としてもかなり飼われていたことが想像される。

説話や法令に表われていることが事実かどうかを裏付けるものが現在では考古学の発掘成果であると一般的に考えられている。神に捧げる供犠、中でも動物に限定して日本、朝鮮半島・中国東北地方の発掘資料の丹念な蒐集から考察をしたものに桃崎祐輔「古墳に伴う牛馬供犠の検討」⁽⁷⁰⁾がある。氏の分析は上述の地域を副題とし、殺馬・殺牛儀礼の出現と年代の変遷及び儀礼の意味するものを、主として古墳の発掘報告書から明らかにしている。考察は多岐にわたるが、まとめとして、北方ユーラシアの遊牧騎馬民族にとっては葬礼に馬を屠ることは普遍的で供犠馬は被葬者の所有と考え、わが国では古墳時代、朝鮮半島ではこれに相当する三国時代では首長層よりも径が10~20mの中小古墳に集中していて馬供犠がみられ、この層が馬を大量に保有もし屠殺も行なったと考え、日本の『日本書紀』にある5世紀末や7世紀の、また同書8世紀の官牧の設定につながるものと解している。桃崎氏の指摘はこれを岡山県に關説すると次のようになろう。1つは5世紀中葉以前より伽倻系を含む渡来系の馬飼集団が居住していたことに関して、総社市南溝手遺跡の平安時代の水田畔から「馬飼」の刻書土器が出土したこと、その内部に馬歯が収められていたとあることである。第2には大阪府奈良井遺跡に先行する中野遺跡では伽倻系陶質土器や最古式の須恵器とともに多量の馬骨や膨大な製塩土器が出土していることである。この2点を岡山県南部に即していえば、伽倻系の馬飼集団の伽倻とは備中の地域、当時の吉備国にとっては関係が深く賀陽郡は加夜氏の本貫の地であり、賀陽氏の氏寺茅廃寺跡、現在の総社市南溝手門満寺はその氏寺のあとであり、門脇氏によれば7世紀前半舒明天皇に加夜(香屋)国造から貢ぎ出された妾女であるとされる。⁽⁷¹⁾加夜は朝鮮の伽倻からの渡来系であるので第二次大戦後の発掘成果の1つで脚光をあげた製塩土器の師楽遺跡も岡山県邑久郡牛窓町の牛窓半島北岸の地である。岡山は渡来系の伽倻系製塩と馬飼とが結びついていたと考えられる。本来牛馬の飼育には塩は不可分の条件であるからである。

桃崎氏は牛馬供犠を伴う古墳から古代牧比定地と隣接している例が多く認められることから牛馬飼育集団と牛馬の供犠には相互関係が考えられるとし、殺馬殺牛儀礼は牛馬飼育集団のアイデンティティであるとする。

氏はその前提の上に立って、北九州のような「軍事的要地」の地域差異はあるものの後期古墳時代に顕著に現われる多数の馬匹の飼育増加は、大陸北方系民族を中心とする地域からの朝鮮半島を経由した騎馬民族の騎馬文化と馬を中心とした牛馬供犠文化との複合体が列島の5世紀前半から中葉のある時期に九州南部から東北南部まで一斉に騎馬風習が受容されてくると分析結果を集約している。

上述の牛馬飼育の伝播のうち馬文化についてはその通りであると考えが、宗教的供犠を伴う文化は基戸をなすものにつみ重ねられるものであり、その結果が伝承として説話に残されるものとする。その点を考えれば、前述したところでもわかるように文献史料上、また説話の史料でも圧倒的に牛の方が多いことから基戸文化は牛供犠であると考えたい。

むすび

生贄は民族の次元で考える場合には古代から現在につながってきている問題である。なぜなら、先に述べたように人が自己を含めて人を殺すことを認めるかどうかの問題と関連するからである。いうまでもなく、それ自身が民族文化といてよいが、現在に至る過程で変化することも事実である。その関係は基戸と表戸として区別することができよう。

最初にカエサルが野蛮人といった事点ですでにそれが顕在化していたと考えねばならない。最初に問題として取り上げたゆえんである。カエサルはガリアの人々とローマ人としての自分の文化との基戸文化の違いを見失っていたといえる。換言すれば征服者として異文化の理解ができていなかったのではないか。或は異文化として理解した結果が野蛮人という言葉であったと考えることもできよう。

カエサルが遠征将軍・統治者であったために被支配地のゲルマンとケルトに対する差異の識別が鋭かったが、己自身の地ローマについて述べていないし、またその必要もなかった。この点についてプリニウスは博物学者であったためローマについても醒めた目をもっており、またその目で見たことを博物誌に誌している。両者には生贄については、プリニウスのようにイタリアの地域に存在することを認めてはいるものの差別視して書いたところが感ぜられる。しかし、これは現在のローマン・カソリックのように自殺を罪悪とするのではなく、神から賜った最高の恩恵であると考えている点では両者共ギリシアローマ系の文化をもつものであり、この野蛮人という考えが定着するのはむしろその後キリスト教が表戸文化として形成されていく中でなされたものであろう。

ケルトの生贄にはいくつかの方法があることはくりかえさないが、ジョン・シャーキーの指摘のように疑わしいとみる見方もある⁽⁷²⁾が火を用いた方法が基本にあったであろうことは確かであろう。これはミルチア・エリアーデによるとインドのインド・アーリア系の文化がいわゆる「火葬墓」(アーンフィールド)を基戸文化としてもち、その創始者が原ケルト人であったとする考えに通ずるものである。ハルスタットの四輪馬車による葬送儀礼は鉄器使用による厳格な社会の階層化をもたらした結果であり、このような火葬が少

くともなされなくなったのはキンメリア人（黒海を出身地とする）のもたらしたイラン文化の影響であろうと推定している。⁽⁷³⁾ 考古学的発掘結果がもたらした地下の世界の神々との交流をもつ供犠のための2～3メートルの深さの儀礼用の穴，神から授かった聖なる力の集積所頭蓋骨の供犠もある⁽⁷⁴⁾がここではふれない。ただ，ケルトの生贄の行なわれたことを示す遺物として，多くの百科事典に図入りで紹介されている1891年にデンマークの北ユトランドのグンデストルプという村の泥炭の中から発見された銀製の「グンデストルプの大鉢」は，T・テイラーによると銀細工師や伝承経路と図柄の詳細な分析・考察の結果インドのモヘンジョダロとの関係が深いことの指摘は注目しておきたい。⁽⁷⁵⁾ インドは「馬の供犠」アシュヴァナーダをもって動物供犠では最高とすることで，ヨーロッパやアジアの他の諸国と異なった存在である。また，人身御供ではパラモンから選ばれることは，戦いにおいて獲得した奴隷を生贄とする場合を除いて共通している。神に捧げる意味で当然のことであろう。インドはインド・アーリア系の民族であることから火が神聖視され，その神アグニは火としてエピファニー（顕現）されるとヴェーダの中で説かれている。ケルトの生贄に火を用いることもまたこの延長上で考えねばならない。

日本は中国の漢字文化圏に含まれる。すべての漢字の生贄に牛篇がつくのは中国においての動物供犠の基本が牛であったと考えられねばならない。人身供犠は山の神，虎への供物としてなされる巴文化の系統と，定期的に人身供犠（1年に1人）を行う蠱の呪術に結びつくタイ文化の系統とがあるといわれている。⁽⁷⁶⁾ 人身供犠については殉死と関連する秦の兵馬俑の関係もあり，ここではふれないが，上述のうち地方文化として残されている人身供犠の中にはわが国でも山鬼（婆）に子供をさらわれる伝承が最近まで残されていたことと関連するかも知れない。1年に1人づつ人身供犠が行なわれるというのは出雲の八岐のおろちをはじめとしていくつかの説話にも残されていることである。わが国ではこの系統の他に「人垣」とよばれる殉死がある。いづれにしても自死と他殺である人柱とを問わずインド・アーリア系の民族と異なるところは火を用いないことであり，この点で古代ケルト民族とわが国とは人身供犠を認めることにおいて共通しており，その手段として火を用いるケルトと火を用いないわが国とは異っている。この基戸文化は変化していくが，法令上では，ローマでは建国567年（紀元前97年），中国では梁の天監年中（502～19年），日本では大化2年（646年）ということになる。グローバルにみれば，この基戸文化はキリスト教によって表戸化し，基戸の生贄が野蛮人ということに定着する。

注

- 1) Barry Cunliffe ; The Celtic World, London (1992) バリー・カンリフ , 蔵特不三也訳 1998 , 『図説ケルト文化誌』 p. 167.
- 2) カエサル, 近山金次訳 (1942初版 , 1998 55刷) 『ガリア戦記』岩波書店 特にことわらない限りこの岩波文庫本によった。
- 3) 滞在期間 , 1975.10 ~ 1976.9
- 4) 前掲 2) p. 86.
- 5) 前掲 2) pp. 85 ~ 86.
- 6) 前掲 2) p. 78.
- 7) 前掲 2) p. 49.
- 8) 前掲 2) p. 49.
- 9) 前掲 2) p. 30. 註
- 10) 前掲 2) p. 4. 解説
- 11) 前掲 2) p. 99.
- 12) 前掲 2) p. 104.
- 13) 前掲 2) p. 198.
- 14) 前掲 2) p. 199.
- 15) 前掲 2) p. 201. わが国の殉死に当る。或は人垣と考えた方がよいかも知れない。ただケルトの場合は焼き殺す。
- 16) 前掲 2) p. 104.
- 17) 前掲 2) p. 202.
- 18) 前掲 2) p. 194.
- 19) Plinii Naturalis Historia (37巻) 『プリニウスの博物誌』中野定雄・中野里美・中野美代訳 (1986) 雄山閣出版株式会社 特に断らない限りLoebの英訳版の上記によった。なお , ストラボンの『地理学』にも関係するところが多いが , これについては別の機会にしたい。
- 20) 『丸善エンサイクロペディア大百科』 (1995) 「イエスとキリスト教」の項 丸善
- 21) 前掲 19) 「神について」の項 p. 78 ([27]).
クリスチアーヌ・エリュエール・鶴岡真弓監修『ケルト人 蘇るヨーロッパ 幻の民』 , p. 78. 妻を殺し自らも生命を絶つガリア人 , B. C. 3世紀末アッタロス1世がベルガモンの聖域に奉献した群像の一部の像の写真が入れてある。また , プリニウスは黒海の出口のダーダネルス海峡のヨーロッパ側のキュノスセマ 犬の墓 という名のついたヘクーバを祭った塚はトロイ王プリアモスの妻ヘクーバがのちに雌イヌとなって海に身を投じたという , と記している。(前掲 19) p. 187. 註6) 日本の弟橘媛に当らう。
- 22) 前掲 19) p. 149.
なお , エトルリア人は儀式を厳しく行うことによって神々の意志を見抜き , 服従し , なだめる必要があると信じていた。そのための『内蔵占いの書』『雷光の書』『儀式の書』があり , 犠牲にされた羊など動物の肝臓を取出して占ったり , 雷光の占星術にも長じ , それを行っていた。その原典はザグレブのミイラに巻かれた『亜麻布の書』が最も長文のものであるとされている。また , この場合も火葬で , 人間の型をした骨納器が出土している。
- 23) 前掲 19) p. 152.
- 24) 前掲 19) p. 153.
- 25) 前掲 19) p. 1244.

- 26) 前掲 19) p. 1245.
- 27) 『世界歴史学事典』(1996)「マギ」(足利 惇執筆)8巻 p.476.
- 28) 前掲 19) p. 1547.
- 29) 前掲 2) p. 198.
- 30) 前掲 19) pp. 152 ~ 153.
- 31) D. ウーランズィ, 内田杉彦訳 「ミトラスの密儀」, 別冊日経サイエンス『考古学の新展開』(1995)日経サイエンス社 pp. 100 ~ 107.
- 32) 例えば身近な例では禅宗が武士階級と結びつくことを挙げておきたい。
- 33) Ninion Smart (1989) The World's Religions 阿部美哉訳『世界の諸宗教 秩序と伝統』教文館, 「ローマの宗教」pp. 242 ~ 257.
- 34) 前掲 33) p. 243.
- 35) Frank Delaney (1986) The Celts, フランク・ディレイニー, 森野聡子訳(1993)『ケルト 生きている神話』創元社 p. 139.
- 36) 前掲 19) p. 704.
- 37) 前掲 21) p. 123.
- 38) 前掲 35) pp. 135 ~ 138.
- 39) ミルチア・エリアーデ, 荒木美智雄・中村恭子・松村一男訳(1991)『世界宗教史』筑摩書房 73 至上の供犠 「アシュヴァメーダ」と「ブルシャメーダ」pp. 247 ~ 249.
- 40) 前掲 39) p. 234.
- 41) ルイ・ルヌー, 渡辺照宏・美田稔訳(1991)『インド教』白水社 p. 15.
Louis Renou, L'Hindouisme
なお, 上記の如く邦訳では『インド教』であるが原書名はヒンズー教を意味しているが, 佛教を含めた内容であることを断っておきたい。
- 42) 前掲 41) pp. 15 ~ 17.
- 43) 前掲 41) pp. 5 ~ 6 .
- 44) 『歴史学事典』3 (1995)「生贄(日本の)」(黒田日出男執筆)pp. 31 ~ 32.
- 45) 前掲 44) 『歴史学事典』2 (1994)「生贄」(高木智見執筆)p. 24.
- 46) Erich Isaac, (1970), Geography of Domestication E. アイザック, 山本正三・田林 明・桜井明久訳, 『栽培植物と家畜の起源』大明堂 pp. 43 ~ 44.
- 47) 前掲 46) p. 145.
- 48) 前掲 46) p. 127.
- 49) 以下, この項目についての漢字の考証は特に断らない限り諸橋轍次, (1955(初), 1976)『大漢和辞典』(全13巻)大修館書店による。
- 50) 鉄井慶紀(1990), 「中国古代における白色崇拝について」, 池田末利編『中国神話の文化人類学的研究』, 平川出版
- 51) このことは現在の日本でも仏壇への供え物としては素糰がよいというような形で残っている。
- 52) 『日本書紀』孝徳天皇 大化2年2月22日の条 朝日新聞社版 『六国史』所収 pp. 186 ~ 187.
特に断らない限り上記を使用した。
- 53) 前掲 52) p. 188.
- 54) 倉野憲司校注『古事記』『日本古典文学大系 1』『古事記祝詞』(昭51)岩波書店所収 p. 179.
- 55) 前掲 54) p. 347.
- 56) 「皇太神宮儀式帳」『新校勅書類従 第1巻』(1932初版 1938 再版)内外書籍刊 所収 p.

11. , p.12.
- 57) 「由氣宮儀式帳」『新校劾書類従 第1巻』(1932初版, 1938再版)内外書籍刊 所収 p.43.
- 58) 日本古典文学大系, 渡辺綱世・西尾光一校注『宇治拾遺物語』(1960)岩波書店 pp.288~295
- 59) 日本古典文学大系, 山田忠雄・山田英雄・山田俊雄校注『今昔物語』(1960)岩波書店 pp.427~430.
- 60) 前掲 59) pp.430~439.
- 61) 前掲 59) pp.325~328.
- 62) 『類聚三代格 後編・弘仁格抄』(1983)吉川弘文館 pp.599~600.
- 63) 前掲 32) p.599.
- 64) 前掲 62) p.600.
- 65) 『古語拾遺』校注 飯田瑞穂(1986)『古語拾遺 附註釈』神道体系古典編 5 神道体系編纂会 pp.48~51, pp.355~375.
- 66) 前掲 52) 皇極天皇 元年(642)7月25日の条 p.151.
- 67) 第二次世界大戦直後まで行なわれていたところがあった水口祭に餅ばなと木や花を藁の束に突刺して供えていたが, 木の小枝を突刺して水口に立てる風習のうち木の小枝はくすみなどを使用して蝗の予防のためのものが変化したのかも知れない。
- 68) 中田祝夫校注・訳『日本霊異記』日本古典文学全集5(1975)小学館 pp.155~160.
- 69) 「伊豫三島縁起」『続群書類従 第三輯 下』(訂正3版 1988)続群書類従完成会 pp.595~603.
- 70) 桃崎祐輔(1993)「古墳に伴う牛馬供犠の検討 日本列島・朝鮮半島・中国東北地方の事例を比較して」古文化談叢 第31集 九州古文化研究会(北九州市立考古博物館内) pp.1~141.
- 71) 門脇禎二(1992)『吉備の古代史 王国の盛衰』日本放送出版協会
- 72) ジョン・シャーキー・鶴岡真弓訳(1992)『ミステリアス・ケルト 薄明のヨーロッパ』平凡社 「巨大な藁人形に人間の犠牲を入れて焼くというカエサルへの報告は疑わしいが(ドルイドはカエサルの征服に対抗する手強い相手であった), 他の古代人同様, ケルト人も人身供犠によって神々の機嫌を取ったことは明らかだ。」(p.40)
- 73) ミルチア・エリアーデ・島田祐己・柴田史子訳(1991)『世界宗教史』 p.146.
- 74) 前掲 73) pp.147~148.
- 75) T. ティラー・秋山慎一訳「グンデストルプの大鉢の謎」前掲 31) 『考古学の最新展開』(1995) 所収
- 75) W. エバーハルト・白鳥芳郎監訳(1987)『古代中国の地方文化 華南・華東』六興出版 チェーン15 人身供犠 pp.154~157.

高松大学紀要

第 39 号

平成15年 2月25日 印刷

平成15年 2月28日 発行

編集発行

高 松 大 学
高 松 短 期 大 学

〒761-0194 高松市春日町960番地

TEL (087) 841 - 3255

FAX (087) 841 - 3064